

「力がある」つまり「強い」「強さ」という言葉は魅力的です。スポーツを目指す人はその世界で一番を目指します。勉強や研究の世界ではその世界でトップを目指します。最近はいろんなメディアでランキングを目にすることが多いような気がします。信仰の世界でもランキングこそ無くてもよく信仰の武勇伝のようなことを聞きます。なかなか生きてゆくのも大変ですよ。これは何も弱さの中で居直るということが良いわけでもないのですが聖書の教える強さについて理解を深めておく必要があるように思います。

1節に「私たち力のある者は」と言われていることを私たちがどう受け止めたら良いのでしょうか？この「力のある者」「強い者」というのは勿論、信仰におけることです。そして「私たち力のある者は」というのは、パウロ自身が含まれているわけですから特別に信仰の強い人に対して語られていることではありません。そもそも私たちの中に、特別に信仰の強い人などいるのでしょうか。時々、牧師というのは、信仰が強い者と捉えられることがあります。しかし神は、信仰が強いからその人を牧師へと召すではありません。誰でも牧師になれるということは無いと思いますが少なくとも自分自身に関しては振り返ってみると牧師でなかったらどうなっているのか分からない。神様が、こいつは牧師にしないと信仰が保てないと思われたからだと思っています。それにこの時代、一人の信徒として、一般社会の中で生活しながら信仰を守っていくことは、牧師として生きるよりよほど大変なことです。本当にそう思っていますし、その意味で信徒の皆さんに敬意を表したいと思っています。ではパウロはどのような意味で「わたしたち強い者は」と言うのでしょうか。

パウロがここで「強い者」とか「弱い者」と言っているのは前の14章に語られていた、「肉を食べる人」と「食べない人」の問題を受けてのことです。すなわち肉を食べる人は一旦偶像の宮に奉納されたからと言っても全ては神様が造っておられるのだから気にしないような人、それを強い者と呼び、そこにこだわりをもって肉を食べずに野菜だけを食べていた人々のことを弱い人と呼んでいたのです。そしてパウロは、両者を見ながら、信仰の弱い人に、そんなことではだめだ、もっと強くなりなさい、と言うためではなく、むしろ、信仰の強い人たちに対して、彼らはその強さによって、人をつまづかせ、その人をも救って下さる神のみ業を妨げ破壊してしまうことへの警告が語られているのです。もちろんだからと言って信仰の弱い人が居直るのもおかしいのですが。

「私たち力のある者は、力のない人たちの弱さをになうべきです。自分を喜ばせるべきではありません。」このパウロの教えは、本当に信仰が強いとはどういうことを語っています。本当に信仰が強い人というのは、信仰者らしい立派で品行方正な生活をしているとか、良い行いを沢山している人ではありません。本当に信仰の強い人とは、人の弱さを担うことができる人です。

つまりパウロはここで私たちに、本当に信仰の強い者となるようにと促しています。それは、人の弱さを担い、自分の満足を求めないで生きるということです。この「になう」という言葉は「担ぐ、背負う」という意味です。ルカによる福音書では「自分の十字架を背負って私に従いなさい」という主イエスのお言葉にこの言葉が用いられています。つまり「担う」とは、重荷を負うこと、苦しみを負うことです。人の弱さを担うことには苦しみが伴います。それは人の罪とそのまま結果を背負うことだからです。それをするによって私たちは、良いことをした、という満足感を得るのではなくむしろ重荷を負って苦しむことになるのです。だからそれは、自分の満足を求めているはできないことなのです。

2節はこのことをもっと積極的に、「私たちはひとりひとり、隣人を喜ばせ、その徳を高め、その人の益となるようにすべきです。」と言い替えています。人の弱さを担うとは、隣人を喜ばせることです。勿論何でも隣人の望み通りにして喜ばせるということではありません。善を行って喜ばせるのです。善を行うとは、主イエス・キリストによって神が与えて下さった救いの恵みに基づくことを行うことです。キリ

ストによる救いの喜びを共有しようとすることです。お互いがキリストに結ばれた兄弟姉妹としての信仰の交わりを確立していくことを努める、ということです。普段、私達は人間関係において人を裁いたり、心傷つけたりしがちなものです。「あの人は気に入くない」「この人は好きだ。嫌いだ」そんなことで心ざわつく私達です。しかし一旦イエス・キリストに目を向けるなら一つになることが出来る。それは同じ信仰に立っているからこそ出来る。これこそ、本当の強さをもっているということであり、そういう者になろうと呼び掛けているのです。

しかし私たちは、そのような本当に強い信仰に生きることが果してできるのだからでしょうか。不安や恐れで胸がいっぱいいっぱいの私達に対して、3節が語られているのです。「キリストでさえ、ご自身を喜ばせることはなさらなかったのです。」「さえ」という言葉を聞くと、よりプレッシャーを感じて「そういうことは主イエスだからできたのであって、だから私達にもそうしろと言われてもそんなことは無理だ」と思ってしまう。しかしパウロがここで語っているのはそのような押し付けがましい教えではありません。別の聖書はここは「キリストも」と訳されています。それはこれが教訓ではなくて事実ということを意味しています。「あなたをそしる人々のそしりは、わたしの上にもふりかかった」という引用は、まさにそのことが主イエスにおいて現実となったのです。神をそしり、嘲る者、それは私達です。神を神として崇めず、自分は信仰が弱い、とよく言います。そうやって言い訳をしているような所もあります。しかし、私たちの信仰は私たちの信仰の強さによって支えられているわけではありません。信仰が強かろうが弱かろうが、私達がキリスト者であり得るのは、主イエス・キリストが、私たちの弱さを担って下さっているからです。自分の満足を求めることなく私たちの弱さを担って下さっている主イエス・キリストの強さによってこそ、弱い私達が救いにあずかり、信仰を持って生きることが出来ます。

そしてそこにこそ、「キリストも」と言われていることの深い意味があります。この「も」によって、私たちの弱さ、罪を担って下さった主イエス・キリストが私達と一つになって下さっていることが示されているのです。キリストが私達を担って下さったことによってそういう関係が与えられているのです。それは洗礼を受けてキリストのからだである教会に連なる者とされることによって与えられる関係であり、聖霊なる神のお働きによって実現している関係です。私達はキリストと一つにされ、キリストの体の一部とされているのです。だから私達も、自分の満足を求めるのではなくて人の弱さを担って、隣人を喜ばせ、互いの向上に努めていくことが出来る。そのように歩もうではないか、とパウロは勧めているのです。

4節には、「昔書かれたものは、すべて私達を教えるために書かれたのです。」とあります。「昔書かれたもの」とは、パウロにとっては、3節に引用された詩篇の言葉などに代表される、旧約聖書のことであります。しかし私達はそこに、このローマの人への手紙など、新約聖書の全体をも含めて考えることができます。聖書に書かれている事柄は全て、私達を教え導くためのものなのです。どのように教え導くのか。4節後半は「それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」と続いています。聖書は私達を「忍耐と慰め」へと教え導くのです。忍耐、それは人の弱さを担い、その重荷を背負い、自分を満足させるのではなく隣人を喜ばせて生きるために必要なことです。忍耐することなしに人の弱さを担うことはできません。信仰の強さとは、この忍耐力であると言ってもよいのです。しかしそれは、言いたいことを言わずにただ我慢することではありません。聖書は、忍耐と共に慰めへと私達を教え導くのです。この「慰め」という言葉は、「勧め」とも「励まし」とも訳すことができます。元々の意味は、「傍らに呼ぶ」です。神が私達を傍らに呼んで下さり、懇ろに語りかけて下さるのです。その

ようにして神が悲しんでいる私たちを慰め、途方に暮れている私たちに歩むべき道を示し、力を失っている私たちを励まして下さるのです。神が与えて下さるこの慰めに支えられているから、私たちは忍耐して、人の弱さを担って生きることができるのです。その忍耐に生きるとは、我慢に我慢を重ねていってどこかで限界が来て爆発するような歩みではありません。忍耐と共に慰めを与えられることによって私たちは希望を持ち続けることができるのです。私たちが自分の忍耐力によって人の弱さを担おうとするなら、それは長続きせず、またそこに希望を見出すことはできないでしょう。私たちは弱い、罪深い者であって、とうてい人の弱さを担うようなことはできない者です。しかし私たちは、私たちのために十字架にかかって死んで下さった主イエス・キリストによって担われているのです。主イエス・キリストの愛と忍耐こそが私たちの愛と忍耐の源であり、また希望の源なのです。

信仰とは、キリストによる忍耐と慰めと希望に生きることです。それは私たちの努力によって獲得できるものではなくて、神が与えて下さるものです。それゆえに5、6節のパウロの言葉は神への祈りとなっていくのです。5節で彼は「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようにしてくださいますように。」と祈っています。私たちが担って下さっている主イエスと同じ思いを自分自身が抱き、また兄弟姉妹が共に同じ思いを抱くようになることを祈り求めていくところに、忍耐と慰めに生きる教会の交わりが築かれていくのです。抜きでた誰かだけが教会を導いてゆくのではないのです。

さらに6節には「それは、あなたがたが、心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです。」とあります。これは、主イエス・キリストの父なる神を礼拝させてください、という祈りです。私たちが、聖書から忍耐と慰めを学び、希望を持ち続けることができるのは、礼拝に連なって生きることによってです。礼拝においてこそ私たちは、キリストが御自分の満足を求めることをせず、私たちの弱さを担って下さった、その恵みを味わい知ることができるのだし、主イエスに担われている者として自分も人の弱さを担い、忍耐に生きようという志を与えられるのです。そしてさらに大事なことは、礼拝において私たちは、心を合わせ声をそろえて、主イエス・キリストの父である神を賛美し、崇めるということです。私たちの間にはいろいろな違いがあり、時として対立もあります。それぞれが弱さ、罪を持っているからそうなるのです。パウロがここで語っていることの背景にも、教会の兄弟姉妹の間での対立がありました。しかしそのような様々な違いがあり、対立もはらみながら、私たちは共に、主イエス・キリストの父である神を礼拝するのです。共に聖書から忍耐と慰めを学び、心を合わせて祈り、声をそろえて賛美を歌うのです。その礼拝において、聖霊なる神がみ業を行って下さり、私たちを一つに結び合わせて下さるのです。この礼拝において聖霊のみ業に共にあずかっている兄弟姉妹であるからこそ私たちは、忍耐と慰めと希望に支えられて、お互いの弱さを担い合っていくことができるのです。